事例報告 2：新狭山ハイツ

住民参加による緑のコミュニティづくり

Shinsayama Haitu Apartment Complex Green Community Development by Citizen' Participation

毛塚 宏* *hirosshi KEZUKA*

自治会からの思いがけない提案

新狭山ハイツ（以下ハイツという）は埼玉県狭山市の堀兼地区に位置する民間分譲団地で、昭和48・49年に開発された。規模は5.6ha（共有地）、戸数775戸、人口2,150人で、PC工法による5階建32棟からなる。団地周辺には帯状に連なる雑木林と豊かな農地が織りなすおやかな田園風景が広がっており、初夏になると雑木林からはカッコウの鳴き声も聞かれるほどである。

昭和49年、発足して間もない自治会から思いがけないひとつの提案がなされた。それは長期緑化事業であった。その意図は「周辺に豊かな雑木林や農地があっても、いずれ開発によってなくなるかも知れない。そうした事態になってもハイツが緑豊かで、心やすらぎ、住み良い環境を有した団地であるためには、現状の緑では不十分であり、長期的視点にたった緑化事業が必要である」というものだった。住民にとってこの提案は意外なものだった。なぜなら、交通が不便な場所ながら、豊かな緑が気に入って入居した人が大半だったからである。しかし、それは錯覚で団地の中の緑の環境は実にみすばらしいものだったのである。その後、専門家による緑の実態調査が実施され「ハイツの緑は公団団地の約1／2程度」との報告がされると、住民は自治会の先取りの提案を満場一致で受け入れた。

長期緑化5ヶ年計画づくり

長期緑化事業を場当たりのではなく計画的に展開していくために、専門家の協力を得て「長期緑化5ヶ年計画」が作られた。その骨子は次の4点である。

- ①緑を倍増する（約1千本を植樹）
- ②周辺の雑木林と調和する樹木を選択する
- ③特色があって親しみのもてる環境、変化に富んだ景観を育成する
- ④総事業費として700万円（材料費のみ）を要する

さて、計画はできたけれども、問題は事業の担い手や資金である。担い手の方は庭づくりや園芸の好きな人、緑化活動に共感する人達で自治会の外郭組織として「緑化推進本部」を発足させることになった。また地区代表のかたち

で「緑化協力員（毎年交代）」が選ばれ、緑化本部の活動を支援する仕組みも導入された。心配された資金の方は、全世帯から毎月50円を5年間徴収する「緑化特別会費制度（5年間で約230万円）」の導入、さらには狭山市との「緑化協定の締結」による樹木の無償提供の受け入れなどで対応することになった。このように、ある程度“自力自走”できる事業推進体制を整え、事業が着手された。

図-1 緑の担い手としての緑化推進本部の位置づけ

- ※1 自治会の戸口代表者（1人／10戸）からブロック代表のかたちで約10数名の緑化協力員が選ばれ、緑化活動に協力

- ※2 年間植栽管理費（整備・行事費含む）720万円

住民による共同作業で緑をふやす

昭和50年の秋に第1回の植樹活動が実施されて以降、緑化5ヶ年の間に延20回もの植樹活動が行われた。植樹された樹木は苗木も含めて高中木約1,760本、低木3,650株に及んだ。植樹場所がツルハシで植穴を掘るような悪条件のところも多く、そうした場所の植樹作業には通常の3倍以上の労力を要した。そういう状況だったから活動を始めて3年目頃から重労働の植樹作業を敬遠する住民が出始めるだけでなく、毎回後始末に翻弄される緑化本部のスタッフの中からも愚痴が聞かれるようになった。そこで高木の植樹は業者に委託し、住民は低木や草本のみの植栽に切り換えられた。5年後の昭和54年秋、緑化5ヶ年事業が所

*新狭山ハイツ管理組合理事長（兼緑化推進本部幹事）

期の目標を達成したことを祝い、団地ぐるみで記念植樹祭が挙行された。当初は夢かと思われた大事業であっただけに、住民の成成感は大きなものであったし、推進役の自治会にとってもコミュニティ活動を展開していく上で大きな自信になった。

表－１ これまでの植樹本数と費用（草本・地被類除く）

	高中木	苗木	低木	費用
入居時	863本	0本	2,310株	—千円
緑化5ヶ年事業 (1975～79年度)	1,442	320	3,647	7,067
美しい環境事業 (1980年度～)	68	0	4,423	5,491
計	1,510	320	8,070	12,558
合計	2,373	320	10,380	

すっかり様変わりした団地の風景

長期緑化5ヶ年事業、その後も継続して取り組んだ緑をふやす活動のおかげで、当初、みすぼらしかった団地の風景は緑豊かな団地に生まれ変わった。写真①は、定点観測結果のひとつである。自治会が創立20周年記念誌を作成した際、100名の住民から100字メッセージを寄せてもらった。その中から団地の風景の移り変わりようについてふれたメッセージを2つご紹介する。「私の母は今83才です。20年前に私たち家族がハイツに越して初めて母が訪れた時につぶやいた一言が“さびしい所だね”。その後、父の闘病生活で足が遠のきましたが、平成になってふたびの来訪に私たちはうきうきと迎えにいきました。久しぶりに見たハイツに母は静かに“何て素敵な風景。まるで絵の中に居るような気がする”とっていつ迄も見とれていました。八重桜が咲くと今でも思い出します。」「ハイツに移り住んで長い年月が過ぎました。当時は淋しい眺めでした。しかし、ただ今は植樹された木々が四季折々に目を楽しませてくれます。春の桜、夏の青葉、秋の紅葉、冬木と。わが家の価値はこの景色にあると思います。」

ある事件をきっかけに緑の自主管理に転換

昭和52年のある時アメリカシロヒトリが大発生し、管理会社に駆除を要請したところ、なかなか対応してもらえず樹木が丸坊主になってしまうという事件が起きた。その原因を探っていくと植栽管理を管理会社が直接やらずに再委託をしていること、しかもその委託費用が実に安いことなどがわかった。また、管理会社が「樹木が増えればいずれ管理費を値上げしてもらわざるを得ない」と言い始めた。いずれ緑の管理が重要になってくることはわかっていたので、緑化本部は植栽管理費を預かって管理業務を統括する自主管理方式に切り換えることにしたのである。こうすることで、業者との間に信頼関係が生まれ、随時随意の管理

写真①：緑の定点観測結果（上：入居当初，下：20年後）

によって管理内容も目立って良くなった。また、自主管理をすることで浮いた管理費の一部は植樹事業にも振り向けられるようになった。緑化5ヶ年事業が資金面で行き詰らず達成できたのはこの自主管理への切り替えによるところが大きい。現在、20数名のスタッフが毎月1回、簡易な剪定、枝下ろし、植樹等の作業を行っている他、専用庭の大きくなった樹木の剪定も住民の要望があれば有償で請け負っている。なお、花壇の手入れは寿会の有志の人々にお手伝いを頂いている。

困ったあげくのケヤキの嫁入り作戦

緑化活動を始めて10年を過ぎたあたりから「枝を切って、日当りを良くして欲しい」という住民からの要望や苦情が増え始めた。最初は「少し我慢ができませんか」とお願いしていたが、明らかに日照障害といえる件数が増えるようになり、住棟南側の大きな樹木については、団地内に移植したり、枝を強剪定したり、売却したりする方針を明確に打ち出した。ただ、やっかいだったのは風格さえ感じさせるほどに成長したケヤキだった。大きなケヤキは高く売却でき、その費用で新しい樹木を購入できるので一石二鳥であったが、緑化本部のスタッフにとってはどこか寂しい気分であった。そうした雰囲気を持拭してくれたのが、あるスタッフの「ケヤキの嫁入り作戦」のアイディアだった。それはハイツが育てた大きなケヤキを他の団地や広場などに嫁がせるという考え方である。自分たちが植え、育ててきた樹木がなくなる淋しさは変わらないものの、どこ

か救われる思いがしたものである。既に40本程のケヤキを移植や売却してきているが、それらケヤキについては、嫁ぎ先が決まったら教えて欲しいと引き取り業者に伝えている。

緑に親しむ四季折々のミニ行事

緑をふやす活動が軌道にのり始めると、ごく自然に緑に親しむ活動に関心が移るようになり、現在では4月に「春の花壇づくり」、茶心のある女性たちの手助けを得て「野だて&草花即売会」、「八重桜の花漬(桜湯用)」, 5月に地域文庫の女性たちとの共催による「草花遊び(ツツジの花摘みで子供たちが公認の花泥棒ができる)」, 6月に団地で収穫された梅の実を活かした「梅酒づくり」、10月にミニ果樹園での果樹収穫やシイタケの収穫(これまでは近隣の雑木林の伐採木を活用していたが、今年初めて団地の中で育ったコナラをシイタケのほだ木にする予定)、12月に「冬の花壇づくり」や高さ10Mのヒマラヤスギを活かした「ジャンボクリスマスツリーの飾り付け」、クリスマス及びお正月の飾りや贈答用にと「シクラメン即売会」、団地の入口に「門松設置」などが定着し、団地の風物誌となっている。

写真②：子供たちが公認で花泥棒を楽しめる草花あそび

緑を繕い・眺める作戦を展開中

荒れてきた緑の環境の“繕い”と同時に住民からの要望を組み入れた緑の“眺え”などにも取り組んでいる。緑の繕いでは、裸地化した部分への日陰地に強い草本や地被類の植栽、広がりのある草地の回復、さらには団地から排出される剪定枝を活かしたチップ材を土壌改良や裸地化防止に役立てる緑のリサイクルなどがある。一方、緑の眺えでは、花壇による玄関口や街角のセンスアップ、ふみわけ道の小路化、ミニ果樹園の造成、管理事務所の玄関前の坪庭づくりなどに取り組んでいる。さらに、今年からビオトープ事業に取り組むことになっている。これは団地の調整池の水溜まりに姿を見せるカモたちがきっかけだった。今は草むらになっている一画を“カモだけでなく、トンボ等の小さな生き物も育つ水辺の環境に変えよう”とい

うことになり、既存の「手作り工作隊」に公募によるメンバーを加え、今年は勉強会、来年は計画づくりと実現方策の検討、再来年から小さな池を中心とした環境を住民の手作り、といったプログラムが想定されている。

写真③：緑化本部のスタッフによる手作りで団地の玄関口に木製デッキ付き花壇を造成

緑とともに住み手やコミュニティが素敵に加齢を

筆者は昨年、管理組合の理事長として、2回目(築後23年)の大規模修繕工事に関わった。竣工時の巡回をしながら、カラーコーディネイトで外観が一新された団地のたずまいを見つつ、改めて「もし、この豊かな緑がなかったら、いくらお化粧をしてみたところでみすばらしい団地だっただろう」と思わずにはいられなかった。“セルフエイド(住民の知恵と汗とお金)”で緑を増やし、育んでいかで“わたしたちの住まい”という意識が培われていった(緑の地域化)。だから、緑の少ない欠陥団地に住んだとは思わず、むしろ“ハーフメイド”の住まいを買い求め、緑を増やし、育て、親しみ、繕い、眺めることを通じて、様々の楽しみが味わえることを幸せと思いたい。

継続は力なりとはよく言ったものである。自治会活動の柱に緑化活動を位置づけ、精力的に取り組んだ結果、夢とも思えた事業を成し遂げ、緑の都市賞や内閣総理大臣表彰などの受賞を通して対外的にも評価されることでコミュニティづくりに自信と弾みがついたことはいまでもない。自治会は緑化活動を軌道にのせると、子供たちの文化活動の拠点としての地域文庫(あおやぎ文庫)の開設、隣接遊休農地の借地公園化(現在は地主に土地を返還し、駐車場化)、小さな丸太小屋(子供の図書館兼ミニ集会所)の自力建設といった大事業を次々と実現していった。緑化事業にこれら成果も加わり、住民にとっての“ふるさと”が育まれてきた。しかし、皮肉なことに時間の経過とともに、住み手は老い、そして建物は老朽化していく、その一方、緑はますます風格を増していく。いずれは建て替えという難問にも立ち向わねばならないが、緑とともに住み手やコミュニティが素敵に加齢する団地であり続けられたらと住み手のひとりとして願っている。